

【1 年次研究】

個人の学びを集団で共有し合う子どもの育成 ～児童が進んで友達と話し合い、思考していく ICT 機器の活用～

大石田町立大石田小学校 東 谷 大 輔

< 研究の要旨 >

本研究では、個人の学びを集団で共有し合う子どもの育成を目指し、児童が進んで友達と話し合い思考することを促す ICT 機器の活用を考察した。特に、国語科の読むことの学習領域において、学習者用コンピュータをどのように使うことが効果的なのかを検証した。

その結果、学習者用コンピュータを使うことで児童が進んで学ぶという点と、話し合いを通して学ぶという点では成果を得られたが、思考を深めるという点では課題がみられた。具体的には、ロイロノート・スクールを使用して教材文やワークシートをデジタル化することで、児童が積極的に自分の考えを書くことができるようになった。また、提出箱機能を使用することで、全員の考えを互いにいつでも見合うことが可能となり、児童が共通点や相違点を話し合うきっかけとなっていた。児童が思考を深めていくためには、授業の中で児童が一人で考え、次にグループで話し合うというような従来の学習の進め方ではなく、一人で考える時間と友達の考えを知る時間をスパイラルのように繰り返しながら課題に向かっていけるような授業形態を構築し、学習者用コンピュータが「個人の学びの蓄積」と「友達との考えの共有」に効果的に働くよう活用する必要があると感じた。

キーワード：共有、ロイロノート・スクール、iPad

1 研究テーマ

本校では 1 人 1 台の学習者用コンピュータとして iPad が昨年度より整備され、授業における効果的な活用の仕方を模索してきた。積極的に活用してきてはいるが、従来の教師主体の「教える」授業形態に ICT 機器を取り入れているため、効果的な活用までには至っていない。そこで、学習指導要領に明記されている個別最適な学びを「個人の学び」、協働的な学習を「考えの共有」という視点で捉え、ICT 機器をその核として考えた。更に児童が「進んで」学び、「話し合っ」て学び、「思考して」学ぶという児童の具体的な姿に迫るために ICT 機器の活用方法について考察していくこととした。

ICT 機器には、従来の紙媒体では多大な時間と労力を使っていたことが短時間で多量に行うことができるという特性がある。そこで児童が主体的に学習に取り組むことができるように、学習の成果をまとめる段階で学習者用コンピュータを用いてプレゼンテーションを行ったり、動画を撮影したりするなど、児童自らが「できたらすごい」と感じることに取り組ませていく。また、日々の授業においてもロイロノート・スクール¹⁾の活用により、児童がワークシートをオンライン上で使用することで、何度も書き加えたり直したりすることが容易になり、一回書いて終わりではなく思考を繰り返しながら深めていくことができる。

2 研究の視点

(1) 主体的に問題解決を図る ICT 機器の活用方法

(2) ICT 機器を活用して児童の考えを共有する工夫

(2) 視点 2 について

ロイロノート・スクールの提出箱機能を活用して児童の考えを一斉に簡単に共有させる。そうすることで児童が何度も繰り返し出てくる言葉に注目して教材文を見返したり、自分とは違う意見にも触れたりしながら、教材を様々な

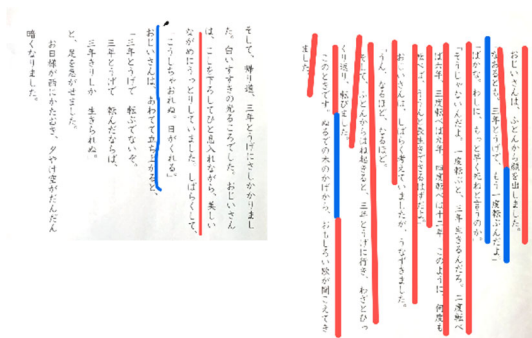
3 研究の方法と計画

(1) 視点 1 について

気付きやすいようにする。そして、気付いたことを相手に問いかけるなど、話し合いを通して問題解決するきっかけとしていく。

イ 子供の学びの姿

学習者用コンピュータに取り込んだ教材文を使用して、場面分けや心情を表す言葉への線引きを行った。児童は間違えてもすぐに直せるため、一人ひとりが意欲的に活動していた。そして、一人一人が自分の考えをもっているため、その後にはしっかりと互いに意見を述べながら話し合うことができていた。また、色を使い分けて線を引くことができるので、ポジティブな表現を赤色、ネガティブな表現を青色などのように、視覚的に理解する手助けにもなっていた。



この単元では、学習のまとめとして一年生に昔話を紹介する動画を撮影することにしており、ただ撮影するだけではなく、身振り手振りを交えたり、声の調子を変えたりして、聞き手をひきつけるような動画をつくることができていた。

5 到達点と今後の課題

(1) 視点1について

画像や動画といった視覚的な理解を支援するものを児童がいつでも見られるにしたり、児童がふと思いついた疑問をすぐに調べることができるようにしたりすることで、児童は常に前向きに学習に取り組むことができていた。自分が気になったり必要としたりした情報をすぐに手に入れることで、教材を

「正しく分かる」授業から、「分かるまで考える」授業に変わってきている。また、書いたものの訂正が容易であるため、児童は自分が思ったことをとりあえず書き、友達の意見を聞きながら推敲していく、という学び方ができていた。

一方でそれぞれの教科の基本となる事項もしっかりと身に付けさせる必要がある。国語科で言えば正しい文字を書くことができることも大切であるし、算数科であれば計算できることなどである。現状、子ども達にはそうした知識・技能も求められている。そのためアナログとデジタルのそれぞれの良さを生かし合うように指導者が教材研究をする必要がある。

(2) 視点2について

主にロイロノート・スクールを使用して共有することが多かった。年度当初はただ流し見している児童も多かったが、少しずつ仲間の考えを参考にして自分のワークシートを見直す姿が見られるようになり、友達の考えを通して多面的に物事を考えることができていたと考えられる。

一方で、思考の過程を共有することが中々できず、完成されたものを見せ合って共有するという、従来の価値観に意識が寄ってしまっていた。個別に学習を進めることと協働で学習を進めることを、児童自身が必要に応じて選択し、その二つの間を行ったり来たりするような過程で授業を進めていくと、より児童の学習の深まりに対して効果的に ICT 機器を活用していくことができると考える。そのためには、学習者用コンピュータ上に単元計画やワークシートが用意されており、いつでも使える状態を整えておく必要がある。

(3) 共有の仕方について

ロイロノート・スクールの提出箱機能を使用することで、児童同士が考えを比較することは容易になった。一度に学級全員の考えに触れることができるので、児童は様々な考えがあることに気付くことができた。

その一方で、友達の考えから再度教材文を

読み、考え直すという深まりがなかなか生まれなかった。児童が一時間の授業を通して何度も考えたいような課題や単元計画を、指導者と児童と一緒に考える必要がある。

(4) オンライン学習について

実践2ではオンライン学習をする児童が2名いた。これまでは、欠席すると家庭でドリル学習やプリント学習に取り組むことが多かった。しかし、会議アプリを使用することで、学校と変わらず授業に参加することができるようになった。また、ワークシートを紙媒体ではなくクラウド上で共有することで、離れた場所においても同じ学習に取り組むことができるようになった。

一方で対面とオンラインを同時実施するという事は、教師が端末を操作する時間が長くなる。そのため、授業そのものの進捗に影響が出ないように、業間に接続することや児童が会議アプリを操作できるようにすることなどの対応が必要である。

注

- 1) ロイロノート・スクールは、株式会社 LoiLo が開発した授業支援クラウドである。教材配布や画面配信、回答の共有、シンキングツールの利用などの機能がある。大石田町の児童生徒全員にIDが付与されている。